

# SMFラウンドテーブル2011

2011年11月13日 埼玉県立近代美術館

埼玉県に拠点をもつアート関係者・表現者・教育者から、アートを楽しむことで日常生活を豊かにしたいと考えるアート愛好家まで、さまざまな立場の方がたがフラットに同じテーブルを囲む場が「ラウンドテーブル」です。今年の〈SMFラウンドテーブル2011〉も、多彩な面々が会場の講堂に集い、開催されました。

前半は、6グループからのプレゼンテーションがありました。

## 1.「〈5750分展〉の3年間」

(報告：鈴木眞里子さん・甘楽絃子さん)



美術教育の現場にいる中学校教員の視点から、美術教育についての3年間にわたる試みが紹介され、美術は「新学習指導要領」の基準が比較的あいまいで自由度が高いが、学校教育の中だけでは限界があるなどの指摘がなされました。ちなみに「5750分」

は、中学校3年間の美術の授業時間の合計です。

## 2.「人間(アートな茶まつり)」

(報告：山尾聖子さん)



埼玉県はあまりにも広く、文化的格差のようなものが存在するが、その広がりのおかげで、アートの位置づけを高めたという思いで取り組まれてきたこと、そしてその中で今、SMFならではのオリジナル作品に基づく連携が生まれつつあるという報告がありました。

## 3.「アルテクラブと川越市民のアート活動」

(報告：草野律子さん)



観光資源の充実がみられる川越でも、市民生活とアートが遊離しているという問題意識をもってアートを



イベントに取り組んできた結果、市民団体と美術館、企業と行政が連携する動きが生まれつつある現在について語られました。

## 4.「まち歩きからの展開」

(報告：青山恭之)



まち歩きやアート・マップづくりの経験から、何気なく歩いていたまちにも新たな発見が重なり、これから地域の文化的資源活用を考えていかなければならないということ、浦和を例にして発表しました。

## 5.「SMF 次のステップに向けて」

(報告：柴山拓郎さん)



SMFの活動のこれまでをたどれば、当事者間のつながりに加え、地域とのゆるやかな連携や世代を超えたネットワークが生まれつつあるなどの成果が見られます。それをふまえて、これからはアートの社会的意義を明確にしていくとともに、継続するためのコアとなる人

材のキャリアデザインがもたらされることの提言がなされました。

## 6.「〈蔵と現代美術〉に参加して」

(報告：出店久夫さん)



観光地川越の蔵を利用した自らの展示を紹介した後、現代の子どもたちをめぐる環境の変化に対する危惧についても語られました。

後半は、文字どおり椅子を丸く配置しての自由討論。

前半のプレゼンテーションを受けて、北本や加須、取手など、県内やその他の地域の事例の報告がありました。そして、それを下地として参加者の意見が交わされ、埼玉という地域におけるアートの問題について議論ができたのではないかと思います。「システムというより、志をつなげていく」という言葉が印象に残りました。

青山恭之 (SMF運営委員)

# 「アートミュージアムラボ 埼玉セッション」報告

2011年12月7日・8日・9日 埼玉県立近代美術館

「アートミュージアムラボ」は、財団法人地域創造が主催する研修プログラムです。美術館を拠点とした先進的な地域交流型事業を疑似体験して、新しい手法を学ぶ「事業体験プログラム」を取り入れているのが特徴です。かねてよりSMFの活動に注目していた同財団の要請を受け、今年度は埼玉県立近代美術館(MOMAS)にて12月7日～9日に開催されました。受講したのは、青森県から熊本県にわたるミュージアムの学芸員16人です。

開講にあたり、コーディネーターの建昌哲さん(館長)からは、次のような話がありました。「美術館は市民社会という海に浮かぶ船のようなもの。市民の支持なしに航海を続けることはできない。美術館が地域社会との関係を積極的に構築する必要があるのはそのためだが、課題は3つある。ミュージアム・リテラシー(美術館に対する批評的な読解力)の向上、美術館のアウトリーチ活動のあり方、そしてメディアとしての美術館の可能性をさぐるジャンル横断的なプロジェクトのあり方である」。

その方針に基づく座学の研修では、鷺田清一さん(哲学者)、藤本由紀夫さん(サウンドアーティスト)、青木淳さん(建築家)、熊倉純子さん(地域型アート・プロジェクトプロデューサー)が市民社会と美術館のあり方について講義をおこないました。

そして、SMFの協力を得て企画・構成されたのが「事業体験プログラム」です。美術館の地階吹抜けに「方丈庵」と柳井嗣雄さんの和紙の作品を設置した不思議な空間を作り、受講者の方がたにさまざまなジャンルのコラボレーションを体験してもらうことにしました。

青山恭之さんのイントロダクションに続き、三浦清史さんの「建築空間を固定的に捉えるのではなく、季節や気分や機会など、さまざまな“き”にあわせた“臨機応変”の展開を考える」という話とワークショップ。職人技の千鳥格子のバズルに挑んだ受講者は本気度全開!

方丈庵での「Air点前」で一服、ほっとひ

と息……と油断しているところに突如、響き渡ったのは藤井香さんの「ダンスが茶室にやってきた!」の声。8名のダンサーといっしょに受講者も体を動かしてから、美術館パフォーマンス「コレオグラファーの目」の展開の話聞き、そして方丈庵と美術館の空間にからむ創作ダンスを鑑賞しました。

現代音楽と美術館の接点を探ったのは柴山拓郎さん。ご自身の「サウンドスケープ」や「サウンドモニター・ワークショップ」の経験をふまえ、現代音楽とどう向き合うかを論じました。続いて山尾聖子さんからは、ミュージアムや地域活動に関わってきた体験談が語られました。

また、まちに出での〈回遊美術館II〉鑑賞ツアーもおこなわれました。山本耕一郎さんと小野寺茜さんの案内により北浦和と西口銀座商店街の作品を見て歩いたり、うわさバッジをつけて自分も「出逢い景」の一部になったりしながら、受講者には美術館の「外」で展開する地域連携プロジェクトの実際を体験してもらいました。

このほかにも、野村誠さん(作曲家)による収蔵作品を楽譜に見立てたワークショップや、夏石番矢さん(世界俳句協会ディレクター)による前衛俳句と音楽のセッションもあり、実に盛りだくさんで内容の濃い3日間でした。

ふだんはミュージアムという企画する側について、参加者の立場をあまり体験したことのない受講者にとって、次つぎに繰り返される異ジャンル・コラボがどれほど新鮮であったことか。また、MOMASの周辺に強力な協働者が幾人もいることに驚いているようすも感じられました。地域と美術館の関係づくりに悩んで研修に参加した受講者諸氏が、SMFのプレゼンテーションに励まされ、それぞれに持ちか



えったヒントを生かして新たな活動につなげていけるよう期待しています。SMF講師陣のみなさん、ご協力に心から感謝しています。

大越久子 (SMF運営委員)・中村誠 (SMF事務局)